



みちに寄り添う、みちにある家

生活空間における「みち」と建築の境界の三つの再考を通じた、地方都市群馬県前橋市中心市街地への提案

0

私が過ごしてきた「みち」の風景



私は山奥の田舎で育った。小さい頃は毎日山道を遊歩し、昆虫や植物を採取していた。また実家は商店街に面し、お祭り時には太鼓や獅子舞、鼓樂り音頭などで道が溢れかえっていた。そんな街を引き起こしたり、想起させてくれる「みち」が毎朝とも新鮮で好きだった。

「みち」は、街や都府にとってのガイドであり、人や車、虫や動物、風や光、音や視覚など、多様な因子で溢れかえっている。

「みち」と建築が断絶した現在の日本の都市

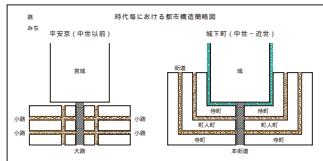


現在、情報化の進展やモーターゼーションの発達により、「みち」は自動車を主とした交通の道となり、建築は快適な環境確保やプライバシーの確保により内側で完結され、両者は断絶されている。だが、未だ法規的に切っても切り離せず、人の生活の上で必ず利用せざるを得ないものである。

こうした背景から、改めて生活するための建築としての「みち」との在り方を見直す必要があるのではないかと考える。

1

歴史的な日本の都市の「みち」



日本の都市は道とともに発展してきたことは周知である。平安京の時代では、大路「路」を軸とし、それに直交する小路「みち」が配される。城下町時代においても、城を正面上に直線上に向かう本筋「路」から、内側側の職人街、外側側の農となる街路の間に、道を寄り添う「みち」が存在する。

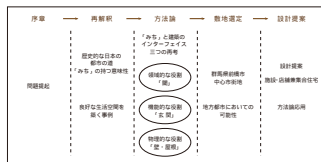
両者とも「路」が都市自治となる儀と祭りと権力の両方の場所。「みち」は住空間の延長として、地域の共有空間として、住民自治のための市民生活の場として、様々な環境変化を遂げる場である。

良好な生活空間を築く事例



台湾の眷村、日本の木ノ小見堂は、軒下空間を連続させた歩行空間である。共通項として、私有地でありながら軒下空間を連続させることで公的な場所として書き残していること、地域の人の歩行空間として機能することである。所有者が親子や、血縁を重んじる中世以降の集落として機能する。所有者が一致していることである。ここから書き出せることで、互いの建物が、相互関係を共有し、少連な形で反響させることで、人々が共通認識できる環境へとなる。「共有建築」とも言えるべきものが存在していると考えられる。

研究・設計プロセス

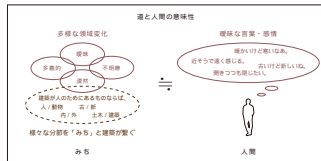


研究から設計提案へ至るためのプロセスを以上で提示する。

- 一、私の目指す「みち」と建築の関係性のイメージ化、意味性の再解釈
- 二、「みち」と建築のインターフェイスにおける「領域的役割」「機能的役割」「物理的役割」の三つの構成要素に関する現代建築の再考から方法論を抽出
- 三、地方都市である群馬県前橋市中心市街地に対し、現地調査の可能性
- 四、三つの方法論及び現地調査から、我が国建築界住宅空間設計提案の普遍性を獲得するための三つの方法論を採用した設計提案イメージ

再解釈

「みち」と建築の関係性が様々な分節をしなやかに繋ぐ



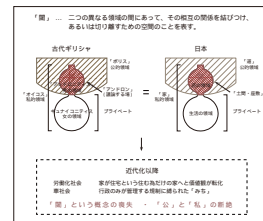
建築家・黒川紀章は、以下の言葉を掲げている。「みち」は多様な環境変化し、「多義的・不明確・曖昧」などといった性質や空間の質を持っている。日本の都市の道や歩行空間を見てもそうである。「そんな「みち」は、曖昧な言葉・多義性を持つ人間の本質的部分と一致している」。ここで、もし建築が人のためにあるならば、「みち」との関係性を構築し分節が合うことは必然的であるではないだろうか。そして、「建築が「みち」との関係性を築く間に、建築の質や空間が持つ様々な分節を「みち」はしなやかに繋ぐことで、多様な質や空間が生み出されていくことが考えられる。

2

「みち」と建築のインターフェイスとなる三つの再考 - 方法論

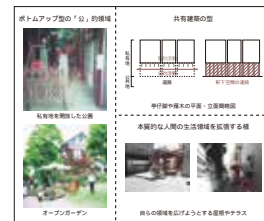
領域的な役割「間」

かつて家が保持した「間」という概念の喪失



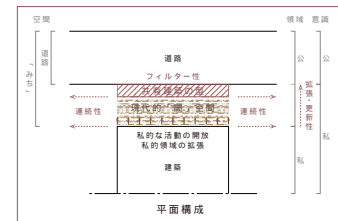
古代ギリシャやかつての日本の民家や町屋の形式の建築と都市の構成は、各自に「間」空間を付随させ、「私」の領域の中に「公」の領域を内包することで「間」空間が再考を誘導する役割を担い、地域や都市が共同体空間を生み出すことを可能とした。近代化以降の労働社会による居住形態の変化、都市化の進展による行政のみが管理する「みち」は、「間」という概念を喪失させ、「公」と「私」の関係は断絶されてしまった。

現代における「間」空間の示唆



こうした現在から「公」と「私」の関係を見ると、トップダウン的に用意された「公」的領域は、規制が多い状態など、街の一部となる利用法への配慮は置き去りにされているのは明らかである。逆に「公」的領域に対して「私」的領域を開放し、拡張するようになり、近代化以降の労働社会による居住形態の変化、都市化の進展による行政のみが管理する「みち」は、「間」という概念を喪失させ、「公」と「私」の関係は断絶されてしまった。

統一性のある多様さ



現代における「間」空間を生み出すために、以下の領域図を提案する。「みち」と建築との間に生み出される「間」空間はあくまで「公」的領域としながらも、意識としては「私」的領域を構った場所であり、私的な活動や増加による許容力を持つ。そのため、フィルタリーな「間」空間を「共有建築の型」として提案し、異なるような環境をつくり出すことが重要である。それらをつくり出す際に、生活や活動を行う「多様な」を「統一性」を保持した固有の要素として見えてくる。

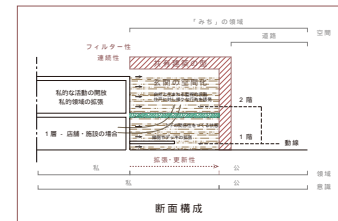
機能的な役割「玄関」

玄関クニコルから「空間化する玄関」



玄関クニコルから得られた知見として、一度解体された地域域での交流を担い、同時に住まいの生活の場としての役割を果たした民家や民衆の上のような実用目的を取り戻すことである。現在の住宅では、都市空間の一部としての延長である玄関、異なる集合体をつくる際、路地のような開放、ソフトな機能を持つ場合とセキュリティ的な役割を持つ玄関など、直ぐに内装を調整して玄関が「空間化」することで、住環境は「パーソナライズ」され、地域に開いた玄関が現れている。「みち」と建築が良好な関係性を築いた時代の玄関は、地域に開き、公的な領域を家の内部に取り込むとともに、監視機能的な役割を持つことで、それらの関係性を調整し、「みち」と建築を緩やかに繋いでいた。

ミチテラス

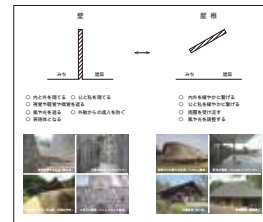


空間化させた玄関を「ミチテラス」と定義し、以上のような断面計画を提案する。「ミチテラス」は、「間」空間でもあり、「みち」の領域に属したものである。「共有建築の型」を構ったことで、内のような外のような前提として、玄関でもあり、一つの部屋のようになり、また、異なるような環境が実現する。

また、1階の玄関や階段のテラス、ミチテラスでは対して異なる受け付け方をすることで、様々な環境が生み出され、住環境に開いた玄関が現れている。「みち」と建築が良好な関係性を築いていくのではないかと考える。

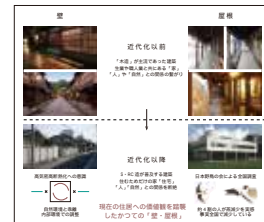
物理的な役割「壁・屋根」

壁と屋根の本質的な役割



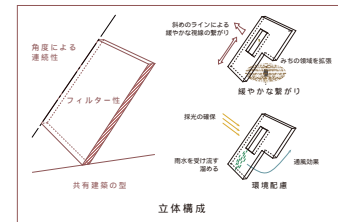
「みち」と建築の境界において、物理的構成要素である「壁」と「屋根」の本来の役割を見る。「壁」は内外を隔て、視覚や聴覚や嗅覚を遮る分離性を持っており、近代化以降のRC・S造の普及や労働社会による住むための家への変化は、「壁」はより本来の役割を強固なものとし、「屋根」は、本質的な役割を失い、「みち」と建築との関係性は弱体化している。都市空間の「壁」は、住空間の役割がより強固に保たれていない「プライバシー」などの環境の確保を確保しつつ、かつての風を取り戻すような新たな環境構築が必要ではないだろうか。

時代の変化における役割の変化



近代化以前の木造主流、生業や職人の場と共にあった家では、人や自然との関係を調整し直すことで、「壁」は本来の役割を緩やかにとどめ、「屋根」と共に「みち」と建築との関係性を築いていた。近代化以降のRC・S造の普及や労働社会による住むための家への変化は、「壁」はより本来の役割を強固なものとし、「屋根」は、本質的な役割を失い、「みち」と建築との関係性は弱体化している。都市空間の「壁」は、住空間の役割がより強固に保たれていない「プライバシー」などの環境の確保を確保しつつ、かつての風を取り戻すような新たな環境構築が必要ではないだろうか。

屋根壁



以上から、二つの領域を合わせた「屋根壁」なる構成を提案する。その名詞として、「間」空間による環境の多様な変化を促すことにより、共有建築の型として異なるような環境が実現する。

屋根壁のラインは「みち」に対して物理的に開いていないように関係性を生み出し、屋根壁による環境の変化を促すことにより、また、環境の役割を失った環境が生み出され、住環境に開いた玄関が現れている。「みち」と建築が良好な関係性を築いていくのではないかと考える。

